

国際会議の

日本人は3S



よしむら かずなり
吉村 和就

(グローバルウオーター・シヤパン 代表)
国連テクニカルアドバイザー

国連ニューヨーク本部に勤務した初日に、経済社会局の部内会議があった。国連らしく、まさに多国籍である。直属の上司は台湾生まれの中国籍、その上の部門長はニュージールランド、更にその上は英国人、アナン事務総長はガーナ共和国出身である。初めての会議だったので、彼らの激しいやりとりに圧倒され、最後まで静かに耳を傾けていた。

会議が終わり帰ろうとしていた時、直属の上司から「部屋に来るようにと……」彼の部屋に入るといきなり怒られた。「なぜ発言をしなかったのか、もし発言しないなら、今度から会議に出るな!」と激しく叱責された。「初めてなの

で……」と言い訳を述べると、「そんな事は関係ない、会議に出ることは、発言の義務を持つことだ、そして相手と議論をして初めて会議に出たことになるのだ」と。

この時から、とにかく国連の場では発言し論議しなければ、まったく存在感がないことを思い知らされた。しかし発言し論議するためには相手以上に知識・知見がなければ馬鹿にされるだけだ。理事会の前には会議資料を深夜までよく吟味し、具体的な事実を基に発言を練り広げた。その御陰で「環境の事は吉村に聞け」と部局内で言われるようになった。彼らからの相談も増えた。

多国籍が参加する会議では発言しなければ存在感が無く、説得できなければ負けである。インドやパキスタンの代表は凄腕、内容は余りないが、とにかく機関銃の如くしゃべり続ける(マシンガン・トーク)、しゃべり止めた時が負けと認識しているらしい。

国連の会議に多くの日本人が参加するが、「国際会議の日本人は3S」と言われている。最初のSはスマイルである、何を言われてもニコニコ顔、次のSはサイレンス(無口)、とにかく発言が無い、その代わり熱心にメモを執っている。国連の論議より本国への報告書作成が大事なのだろうか。そして最後のSはスリーピング(睡眠)である。議論に参加出来ず、東京から十三時間のフライト、時

差ほけとタイトなスケジュールと相まって、会議の後半には、ほとんど眠りに陥るようだ。

多国籍が同居する国連では、多くのレセプションがあるが、飲みながらのジョークは、本当に面白い。外から見たその国の姿をズバリ表している例が多い。

もうおなじみであるが、典型的なのが、「世界で最高の幸せは？」。その答えは「ユダヤ人の給料を貰い、アメリカの家に住み、ドイツの車に乗り、イタリアの服を着て、日本人の妻を持ち、スイスの銀行に金を預け、イギリス人の執事を雇い、中国人のシェフを雇って暮らす」である。登場して



くる各国の人に聞くと、「それは昔の事だ」と一応否定するが、それでまた盛り上がるから面白い。更に日本人に登場を願う。

国連のジョークで「国際会議での最高の議長は？」、答えは「日本人から『発言とお金』を引き出せる議長だ！」。もう一つの日本に対するジョークは「日本はATM（現金自動支払機）である、たたくと必ずお金が出てくる……」最初にこれを聞いた時は頭にきたが、しかし判るような気もする。この日本に対するジョークにも「それは昔の事だ」と笑い飛ばせる時代が来ることを願っているが、やはり「日本人は勤勉だが、無口で自己主張しないので何を考えているか判らない、不気味である」は定説である。

では日本人には自己主張する能力がないのか、いやそうではない。会議で発言する日本人の原稿をみると三段論法であり完璧である、しかし論文ならまだしも、発言用の原稿用としては失格である。マシンガン・トークに慣れた参加者にとり、日本人の持ち時間いっぱい、質問時間まではみ出し、原稿の棒読みを聞かされると我慢できないらしい。「吉村さん、後でサマリーを教えてね」と居眠りに就いたり、「時間の無駄だ」と、プリントされた資料を持ち、会場から立ち去る輩も多い。

思うに日本人に欠けているのは語学の能力ではなく、英語、日本語に限らず言

葉を武器として使う戦略・戦術そして自己PR能力が鍛えられていないのではないか。

筆者は昔、ニューヨーク州立大学で、「ビジネスマンの為のプレゼンテーション講座」を受けたことがある、これは具体的に面白い。基本編「積極的に攻めるときは、赤いネクタイを……、お詫びや受け身の時は青ネクタイを着用する」から始まり、「五分間の説得の中で、固有名詞と数値を三回以上使わなければ、人を説得できない」、「十五分以内に一つのジョークを挟め」、「プレゼンテーションの時は、自分の身長の子から五倍の距離を移動しながら、聴衆に恐怖心を与え、語りかけよ」、「会場での目線はZ字で、会場の奥から始まり、前方に移動せよ、それを繰り返すこと」、さらに「プレゼン時に原稿を読んだら、そこで負けだ。相手から見ると自信のなさをプレゼンしていると思なされる」。まさに目からウロコである。もし日本の大学で、このようなプレゼン講座が必須になると、日本人の自己PR能力が飛躍的に高まり、世界に通用するのではないかと思う。日本人は専門知識が豊富だが、その表現方法、手段の訓練が不足している、その能力向上に国や企業は組織を挙げて取り組むべきであろう。最後の国連のジョーク、「欧米人は一を知って百倍にして話す、日本人は百を知っていても、一しか話さない」である。

話は飛ぶが、筆者は二〇〇一年の九・一一同時多発テロをニューヨークで経験した後、日本に帰国。古巣の一部上場会社の経営企画室（社長直轄）に復職した。ニューヨークに行く前に比べ、会社の有利子負債が異常に増えていたので、海外投資の実態を英文契約書を基に分析し、問題点を社長や会長に報告したところ、後で担当役員から怒鳴られた「君はなんの権限があつて会長に報告したのか、なぜ事前に俺に報告がないのか」、経営企画室は社長の直轄組織ですから……と述べると、その役員は「そんなことは関係ない、まず担当役員に報告するのが、日本のビジネスの基本だ」と。また会議で、疑問点や発言を繰り返した所、「せっかく根回しが終わっているのに、今度からあいつを会議に呼ぶな。うるさいから……」、そして会議に呼ばれなくなった。

国連時代は「発言しなければ会議に出るな」と言われ、日本の会社では、「発言すると、うるさいから会議に出るな」と言われ、まさに文明の衝突に遭遇した結果であった。

(了)